

京都市伏見区東高瀬川周辺の昆虫リスト (2002年10月から2005年12月)

中嶋 智子 水谷 文恵 白岩 秀昭 江浦 邦彦 田辺 隆志

Insect Species Verified in the Riverside Area of Higashitakase-gawa River (Fushimi, Kyoto City) from October 2002 to December 2005

Satoko NAKAJIMA, Yoshie MIZUTANI, Hideaki SHIRAIWA
Kunihiko EURA and Takashi TANABE

キーワード：昆虫相、昆虫種リスト

key words : Insect Fauna, Species-level Checklists, Biological Survey

はじめに

我々は当研究所構内の空き地を利用して、都市部に身近な昆虫類を呼ぶためのビオトープづくりを試験的に行っている。その際、バックグラウンド調査として、周辺の生物相調査を実施し、ビオトープの生物学的意義と評価を行うことを検討してきた¹⁻⁴⁾。

また、昆虫類の種の多様性を考えると、特定地域の特定時期に、どれだけの種類が生息することができたかということ記録し、資料とすることは、地域の「生物多様性」を考える際の基礎的資料になるとも考えている。

研究所構内から最も近い緑地である東高瀬川周辺を含む研究所隣接地域の昆虫類のリスト⁵⁾と構内のそれは既に報告してきた⁶⁻¹⁰⁾。今回は、2002年10月から2005年12月の昆虫リストを記録した。

調査地域と調査方法

京都市伏見区に位置する東高瀬川河畔を含む当研究所隣接地域、約2kmを歩くコースで実施した。調査地域のルートや概観は先に報告したとおりである^{3, 4)}。調査はほぼ月1回の頻度で行った。採集方法などは、前報と同じ⁵⁾であるが、チョウ類のルートトランセクト調査との併行実施であるため、季節などにより幾分恣意的となり、目撃・見取り調査が主となった。また、調査は成虫の採集を原則とし、各種の図鑑・資料等で種まで同定したが、通年調査により頻度高く出現する種や多種との区別が容易な種については、目撃やデジタル写真撮影、聴覚による判定などで確定種とした。幼虫での同定を行った種の場合も同様である。

結果

調査期間中の月別出現昆虫類のリストを表1に示した。

調査期間中にリストアップした昆虫類は、2002年は82種、2003年は85種、2004年は84種、2005年は93種、4年間の調査期間中に12日59科169種を確認した。その結果、同調査地域で1999年3月から目撃・採集された昆虫種は、計12目73科217種となった。

当研究所構内では7年間で11日111科428種をリストアップしたことと比較すると、種数は少ない結果となった。これは、調査頻度が1/4以下であることと、研究所構内で実施した特定の分類群の集中的な調査は、チョウ類以外では行っていないことなどによると考えられた。

本調査地域のチェックリストは、研究所構内に比べ、より広大な草地環境をもつため、バッタ目やカメムシ目、コウチュウ目などの各分類群別の集中的な調査を実施することで、更に充実できることが、これら両調査地の昆虫相の比較から示唆された⁶⁻¹⁰⁾。

確認した昆虫類の種数とその累積種数を年次ごとに図1に示した。年次ごとの確認種数はほぼ安定しており、累

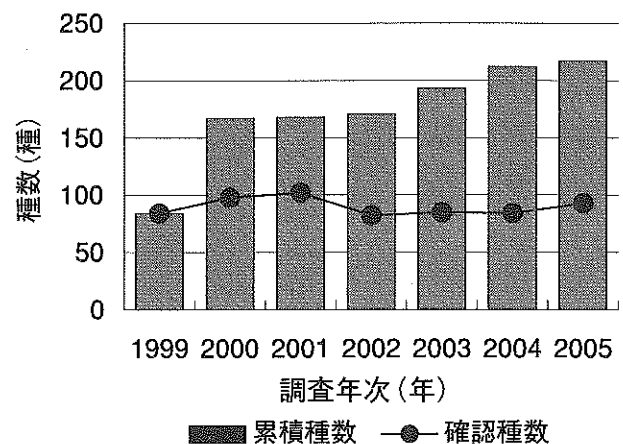


図1 調査年ごとの確認種数の推移とその累積種数

(平成18年7月31日受理)

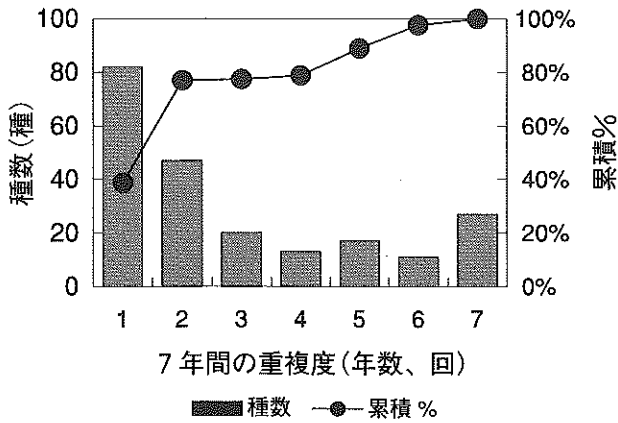


図2 調査年間の確認種の重複頻度

積種数もここ数年安定傾向を示した。これは、前述のように、チョウ類のトランセクト調査と併行実施している本調査方法での確定種数の限界を示すものと考えられた。

次に、図2に調査年間を比較して、確定が重複した種について、その頻度を1~7回に分けて示した。7年間で5回以上確定種となった種は25%と全体の1/4で、38%の種はある特定の年にのみカウントされた種であった。したがって、本リストの充足性はまだ低く、更に詳細な調査を行う必要があると考えた。

特定の地域であっても、その環境に生息する昆虫の全種リストを作成することは非常に困難ではあるが、地域のチェックリストとして更に充実させていきたいと考えている。

まとめ

1. 2002年から2005年に京都市伏見区の東高瀬川周辺地域を含む当研究所隣接地域で目撃・採集した昆虫のリストを掲げた。
2. 4年間で、12目59科169種を確認した。
3. 1999年3月から同地域で目撃・採集された昆虫種は、12目73科217種となった。
4. 確定種数の推移から、地域のチェックリストとして充実させるには、更に詳細な調査の必要性が明らかとなった。

引用文献

- 1) 中嶋智子ほか：本誌、45、81 (2000)
- 2) 中嶋智子ほか：本誌、46、42 (2001)
- 3) 中嶋智子ほか：本誌、48、33 (2003)
- 4) 中嶋智子ほか：環境科学総合研究所年報、24、79 (2005)
- 5) 中嶋智子ほか：本誌、48、97 (2003)
- 6) 中嶋智子ほか：本誌、46、82 (2001)
- 7) 中嶋智子ほか：本誌、47、82 (2002)
- 8) 中嶋智子ほか：本誌、48、97 (2003)
- 9) 中嶋智子ほか：本誌、49、93 (2004)
- 10) 中嶋智子ほか：本誌、50、11 (2005)
- 11) 中嶋智子ほか：本誌、51、(2006)